
progress

天の群雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

progress

【NZコード】

N4910A

【作者名】

天の群雲

【あらすじ】

幼なじみと従兄妹の関係である拓人と沙綾。次第にふたりの関係は恋人へと進展（progress）していくのだが…。スタートに至るまでのふたりの成長劇。甘く切なく笑い有り?のショートストーリーです。

(前書き)

この話は多少電波を含むので、読んで頭痛等の症状がでた場合には直ちに休憩しましょう。それでも収まらない場合はかかりつけの医師にご相談くださいな。』
初めての作品なんで覚悟してくださいね

話を聞くよりも実際に見た方が早いだろう。人によっては羨ましが
る様な状況ではあるが、俺にとっては…。

「お兄様あ…こっしょここーみみみ…」

俺を誘う猫なで声。

「まだ早いーもう少し我慢するんだー！」

「そんなん、イジワルしないでよ…あや、もひ我慢できなこよう

…」

上田遣いの潤んだ瞳。

「だからまだ早いってーーなんでこんな真夏日に市民プールの開店
待ちをせにゃならんー?」

…とまあ、こんな感じで俺、拓人は従妹の沙綾さあや^{たぐと}にせがまれているの

だ。

「だつて…早く行かなきゃみんな並んでるよお??」

「並ぶかっーー外は何 だと思つてんだ!?死ぬわーー」

「プール…いつぱいになつちやつよお??」

「なるかっーー大体その気持ち悪い口調をやめろー何なんだ、お兄

様あ……つて……？」

沙綾は子供みたいに口を尖らせて俺を睨む。

「む～～……お兄ちゃんが隠してた本に書いてあつたんだもん……」

「な……！」

（なんだ……）のお約束な展開は……？

俺は出来るだけ平静を装いながら素つ氣なく話しかける。

「なあ沙綾……こんな早い時間から並んだってナンセンスだ。そう思わないか？」

「お兄様は妹に甘えられるのが大好きなんだよねえ……あつ、それともご主人様の方が良かつたかなあ？」

…聞いちゃいねえ。

「あつ……そうだ わあやねえ、お兄ちゃんが喜ぶかと思つて……」

そういうと沙綾はおもむろに服を脱ぎだした。

「なつ……お前何してるんだ！？…つけつけ……！」

と沙綾につつも顔を隠した指の間からしっかりと覗き見る。

「じゃ～ん

「な……そんな馬鹿な……？」

「どう?似合ひました?」

グラビアアイドルのよつと腰に手をあてたポーズをとつたまま血團
げに俺の方をみる。

その沙綾が身につけていたものは……

「スクール水着!?」

「お兄ちゃんの為に着てきたんだよ?何か気の利いたコメントは無いの?」

上田使いで俺を見つめてくる沙綾……。

「B78・W54・H79。身長147㌢、体…ぐはあ…?」

沙綾の渾身の右ストレートが俺の頬に炸裂する……

「何でお兄ちゃんがさあやの3サイズしつてるの…?っていうか真
面目に聞いてるんだからちゃんと答えてよ……」

沙綾の瞳が潤んでいまにも涙がこぼれそうになる。

やれやれ、ちょっとふざけすぎたか…。

真面目に沙綾のことを見てみる。

まず髪型は結構上方を黒いリボンで結わえてある、いわゆるツイ
ンテール。沙綾のトレードマークだ。

そしてまだどけなさの残る可愛らしい顔。結構モテてるんじゃない
いかと思つ。

最後に身体だが……まあ今年中学卒業なんだから……期待する方が無理

つてもんだな。スクール水着は確かに好きだが、それが更に沙綾の幼児体型を強調している。

「氣を落とすなよ」

俺は沙綾の頭を優しくなでてやる。

「お兄ちゃん、なんかメチャクチャ失礼なこと考えてない…？？」

せ、ぜんぜん考えてないぞ！むしろ褒めてるーー。」

前半だけだが、

俺の考えを察したのか沙綾は、あからさまに気落ちしている。

— もうやつ魅力ないのかな？？

うつ、沙綾のこの瞳はヤバい… うるつる光線がチクチクと俺に突き刺さる。

背中に冷たい汗が流れたと同時に、ふと気づく。沙綾の様子がおかしい……。

何かを言いたそうにしているか何度も躊躇しているように見える

じつじつ決心したのか、おずおずと話しだした。

「……あ、あのね……こせなつ！」と叫んだ。「お兄ちゃんがやんばり、くつするかもしねないよ！」

沙綾の肩がふるふると震えだす。顔はつづむいて耳まで真っ赤になつている。

……こつかこんな日が来るんじゃないかと思つていた。沙綾の俺を見る日は従兄ではなく…ひとりの男として捉えていたからだ。この時に備えて自分の中では既に決心がついていた。沙綾が自分の気持ちを伝えてくれたら俺は…

「あ、ああやね…あの…その…ひつ…うぐ…」

緊張のあまりに泣きだしてしまつ沙綾。両手で顔を覆つている。自分でもキザだなと思いながら軽く笑つて、沙綾の肩を抱き寄せる。

…。

「…う…ぐす…えつ…」

驚いて泣くのをやめた沙綾の首もとへ顔を近づけて、そつと囁いた

…。

「大丈夫だ…」

「あ、それって…どういつ意…んつ…？」

皆まで言わせず俺は沙綾の唇を自分の唇でふさぐ。
眼前には瞳をまんまるくさせた沙綾の顔…。

そう…何も心配することなんて無かつたんだ…。いつだつて沙綾は俺を見ていてくれたし、俺も沙綾のことを見ていた。
もしかしたら、大丈夫という台詞は自分を納得させるために出た言葉なのかもしぬれない。

自然と唇が離れる。沙綾をまっすぐに見据えて言葉を紡ぐ。

「沙綾の気持ちはなんとなくだけ気付いてたよ…。ずっと前から…」

沙綾が一瞬驚いたような顔をした。

「俺も沙綾が好きだったから… その気持ちに気付いた時は嬉しかったよ。でも伝えられなかつた…」

そう… それはふたりでいる時間が楽しかつたから。告白する事で今

の関係を失つてしまつのが怖かつたんだ…。

「はは… 情けないお兄ちゃんだろ…？」

乾いた笑いが出た。そんな俺を沙綾は… 何も言わずにそつと抱きしめた。

「沙綾…？」

「さあやね…怖かつたの…。もし自分の気持ちを打ち明けてフラれちやつたら…きっとおや、お兄ちゃんのそばに困られなくなつちやうから…っく…」

沙綾…泣いてるのか…？

「…それならね、おやはずつと従妹のままで…」よつて… そう… したら… ぐす…つ… ずっとお兄ちゃんのそばに居られるつて… ひつく…思つたの…！」

気持ちが高ぶつたのか、沙綾の俺を抱く手に力が入る。

「でもね… ひとつも辛かったの… ビ�ビヨウもなこくひこ胸が…
ぐすり… 苦しくて… つー」

… そうだったのか。沙綾も俺と同じように考えていた。変わつてしまつを恐れていたのは俺だけじゃなかつたんだ…。それなのに…
俺つて奴は… ！！

「沙綾の気持ちがはつきり分かるまでは自分の気持ちを隠しておこうって… こんなこと考えてたんだ、俺…」

自分の情けなさで涙が出てきくなる。

「ありがとう… お兄ちゃん」

えつ…？俺は驚いて沙綾の顔を見る。

「お兄ちゃんがなにを考えてたんだとしても、さあやの事が好きつて気持ちとは違いないんだよね…？ それならわあやは… 嬉しごよめた。」

えへへつといつ感じで柔らかく微笑む沙綾。

俺はこみ上げる暖かい気持ちを押さえきれずに思い切り沙綾を抱きしめた。

「沙綾… つー！」

「あつー… 、痛いよお兄ちゃん… 」

俺はそのままベッドに倒れ込み、沙綾に激しくキスをした。

「んっ……はあ……はあ……お兄ちゃん……！」

沙綾も夢中で俺の唇を求めてくる。

わつあまでのキスとは違つ……本当の恋人同士の濃厚なキス。ゼロ距離で俺と沙綾の舌が絡み合つて、あたりにクチュクチュと水音が響く……。

脳髄までとろけそうな強い刺激が流れ込む。

「……っ……はあ……お兄ちゃん……！」

沙綾の濡れた瞳が俺を見つめる。セレジドふと気が付く。

「わつこ……沙綾、お前水着のままだぞ？いいのか……？」

「えつ……っ……はあ……はあ……別にいいよ……お兄ちゃんの為に着てきたんだし……」

とろさんとした声をしながら答える。

「……お前、わつこのやつとつの中ずっとスクール水着だったのな

「わ、そうだけど……なんでそんな顔してるのかな……？？」

俺は堪えきれずに吹き出しちゃつた。

「ふつ……ふつふつ……あははははは……スクール水着で告白だつて

！？聞いたことない……ははははーーー！」

ポカーンとして沙綾は俺を見る。俺が言つてゐることを理解したのか
その顔に徐々に赤みが差してきて、表情が険しくなる。

「お兄ちゃんの……」

「……へりへり……えり……？」

「お兄ちゃんの……バカーッ……！」

「バキッ……ボキッ……！」

「がはあつ……！？べがつ……！」

右ストレートと左フックのコンビネーションがそれぞれ顔面とレバーを的確に捉える。っていうか、今、肋骨……が……。

「ふ……良いもの持つてんじゃねーか、姉ちゃん……」

「サッ……。俺は沙綾の上に覆い被さるよつて崩れ落ちた。

「……えつ！？お兄ちゃん！そんなつ……起きてよ、お兄ちゃん！お兄ちゃんつてばあ……！」

薄れゆく意識の中、沙綾の体温を感じながら俺は思つていた。

やつといつまで来たんだ。焦る」とはない。時間はまだまだある。

「わあや！」こんなオチ嫌だよ……田を覚ましたよ……なんで満足そう
な顔してるのー！？」

満足そう……？満足したんだよ。だつて……やつとふたりでスタートを
きたんだからな……。

「」で俺の意識は心地よいまどろみの中に落ちていった。

(後書き)

おめでとうございます。ここまで読めたと言うことは、あなたと私は友達になれるということです。全然嬉しくないですって?またまた:遠慮なさらずにw

どうでしたか?ふたりの進展は?そんなに大袈裟なものではないと 思いますが、少しでも共感された方がいたら嬉しいですね。付き合つて下さりありがとうございました。

感想、リクエスト等あればメッセージをお願いします(- - > *)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4910a/>

progress

2010年10月15日23時43分発行